



秋季大祭に先立ち 沖津宮御神璽迎へ齋行

当大社最大の神事である秋季大祭に先立ち、沖津宮の御神璽を大島の中津宮にお迎えする「沖津宮御神璽迎へ」が、台風接近により当初予定から二日遅れる九月十三日に齋行された。

前日十二日に高向宮司以下奉仕神職三名が大島へ渡島、古例に則り中津宮にて参籠齋齋し翌朝の神事に備えた。

当日午前七時、「国家鎮護」の大旗、紅白の吹流し、船首に「波切り御幣」と飾り立てられた御座船「海栄丸」(船長 中村真一氏)に宮司以下神職と海洋神事奉賛会権田会長、沖中両宮奉賛会・翼賛会々員が乗り込み大島港を出発した。

早朝より快晴、真夏を感じさせる気候で海上は風、午前九時には無事沖ノ島に到着。直ちに海中にて禊をし、沖津宮本殿で出御祭が齋行された。

宮司が祝詞を奏上し、御座船奉仕の中村真一氏、沖中両宮奉賛会より河辺紘氏、海洋神事奉賛会長・権田仁八郎氏、宗像漁協大島支所長・田志寛氏が玉串を捧げた。そして、神職が御神璽を奉持し、お祓いをしながら参道を下り御座船に奉安、一行は再び大島中津宮へ向かっ



10月祭事暦	
1~3日	秋季大祭
15日	月次祭
午前10時~	高宮祭 第二宮・第三宮祭
午前11時~	総社祭 豊栄舞奉奏
17日	表千家献茶祭
午前11時~	
【大島・中津宮】	
11日	沖・中両宮秋季大祭
午前9時~	沖津宮大祭
午前11時~	中津宮大祭

余滴

十月一日から三日まで行われる秋季大祭は田島放生会ともよばれ、当大社最大の祭りである。その大祭に先立ちみあれ祭が一日の朝行われる。沖津宮、中津宮の御分霊を載せた御座船が、大島から神湊まで約十キロの海上を神幸する。そして辺津宮の御分霊を載せた御座船が海上でお迎えになり、三女神が揃って辺津宮に入御される神事である。みあれ祭の起源は、中世に行われた「長手神事」又は「長妙神事」とも言い、沖ノ島の長い竹に布を附した物を宗像大神の象徴として辺津宮に迎え、祭を行ったといわれる。当時は春、夏、秋、冬の年四回行われていた。江戸時代に二回となり、その後中断。昭和三十七年に復興、現在に至る。みあれの「あれ」とは出生、出現という意味がある。神様に御出現して頂く事により、新しい力を与えて頂き生命力を甦らせる神事である。今日、こうした「みあれ神事」が行われている神社は少ないが、「葵祭り」で有名な京都の上賀茂神社の「御阿礼神事」は古く重儀とされている。この祭りは、葵祭りに先立ち、上賀茂神社の背後にある神体山から神籬に神を迎え、神社に神幸して鎮祭される神事である。尚、今年には地域の強い要望があり、試行という形ではあるが約三十年振りに神湊の街中を児童を先頭に氏子が三基の神輿を担ぎ、町中を練り歩く。この伝統ある宗像の文化に触れることで、地域の活性化と発展に繋げていただきたい。(杉)

遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

神具・装束・授与品
井筒

装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る
フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401
フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23
フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406 福岡県宗像市稲元4丁目20 電話(0940)32-2567



大島に到着



中津宮入御祭

た。
午後一時、島民が出迎える中、大島港に到着。大島駐在所の福元輝明氏先導により中津宮まで御神幸、同宮本殿で入御祭が斎行され、本年度の「沖津宮御神霊迎え」は滞りなく終了した。
尚、中津宮本殿内陣に仮奉安された沖津宮御神霊は、中津宮御神霊と共に十月一日の「みあれ祭」にて、海上にてお迎



御座船「海栄丸」

えされる辺津宮御神霊と年に一度の再会を果たされる。約百五十隻の漁船が御座船に従い御神幸をする様は、玄界灘を闊歩した古の宗像水軍を連想させる勇壮な海上絵巻である。
総社・辺津宮内陣に三宮の御神霊が奉安されると三日間に亘る秋季大祭の幕が開ける。

九月九日、午前十一時より当大社清明殿にて秋季大祭警備打合せ会が開催された。この会議は、十月一日から三日までの秋季大祭の総合的な警備体制を協議するものであり、「みあれ祭」を取仕切る海洋神事奉賛会の打合せ会と並んで重要な会議である。当日は、宗像警察署、宗像地区消防本部、

秋季大祭警備打合せ会

宗像市消防団、交通安全協会、地元田島・深田区、宗像土木事務所、西鉄バス宗像等、多くの関係団体が出席した。
尚、本年は「みあれ祭」終了後の神輿行列を約三十年ぶり試行ではあるが神湊郵便局前まで延長する事になり、神幸の警備・交通規制の方法について慎重に協議が重ねられた。



九月十四日、平成二十三年度第二回目の宗像大社氏子会総代総会が置鮎会長以下三役・評議員・総代一〇名の出席の下、大社・清明殿で開催された。神宮並皇居遙拝、国歌斉唱、敬神生活の綱領唱和、会長・宮司・来賓である福岡県議会議員・阿部弘樹・伊豆美沙子・吉武邦彦三氏の御挨拶を頂き議事へと入った。
議事では、まず先般御逝去された中村昇副会長の後任として山本清(福津市若木台)が当該

氏子会総代総会 開催

新副会長に山本清氏(福津市若木台)

地区の方々より推挙された報告があり、全会一致で承認された。引き続き秋季大祭を中心とした議案の説明があり、原案通りの承認を受けた。
特に今年の秋季大祭より輦台(神輿)の陸上神幸が神湊郵便局前まで延伸される等、祭典時刻の変更を踏まえ説明がなされた。秋季大祭氏子奉幣使については後日、谷口哲二氏(宗像市赤間地区名残区)が奉仕の旨、当該地区より御連絡を頂いた。尚、真近に迫った秋季大祭で



は氏子会の皆様に例年、海上神幸・陸上神幸を中心に諸行事で御奉仕頂いている。

宗像大社海洋神事奉賛会 「みあれ祭」打合せ会

八月三十一日、残暑の中、海洋神事奉賛会「みあれ祭」打合せ会が権田仁八郎会長以下宗像七浦の漁協関係者十二名出席の下、当大社斎館にて開催された。

同会は、宗像七浦の漁協関係者・水難救済会により構成され、三月頃に行われる宮中への若布献上、秋季大祭みあれ祭等、海に関わる当大社の神事を中心にご奉仕を頂いている。

会議に先立ち、宮司が本年も

宗像大社菊花会 定例理事会

九月十一日、当大社清明殿にて宗像大社菊花会定例理事会が開催された。千々和正信会長以下、九州並びに山口県から三十三団体の代表、計六十名が参集し、理事会は開催された。

会議では、間近に迫った第四十一回西日本菊花大会の最終的な出品等の確認がなされた。又、本年は寒暖の差が激し

「みあれ祭」が盛大裡に斎行される様お願いと共に、四月の宮中への若布献上が無事に行われた事の謝辞が述べられた。議事に入り、「みあれ祭」の御座船奉仕船、船団編成などを中心に審議が行われた。又今年、約三十年振りに神湊・頼宮から街中を約一キロ神湊郵便局前迄、神輿行列が行われる事になった旨が報告され、大島港御発鞦の時間の見直しが協議され、大島港御発鞦を例年より10分早める事に決定

い為か菊の生育状況が芳しくないよう、四苦八苦している様子が会員から聴かれ、中には出品を取り消す方もおられた。

九州各県を中心に、菊花愛好家が丹精こめて作り上げた銘花約三千鉢が、境内中に展示される、十一月一日開幕の西日本菊花大会。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、こ

した。更に例年通り各漁協が一致協力して所属船の極力参加を呼び掛ける事、事故のない様注意する事を申し合わせた。今年も多くの船に「みあれ祭」に御参加頂き、勇壮な海上絵巻となる事を期待したい。



の他に大臣賞が十一賞あり、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれている。



神宝館特別展

「宗像大社刀剣展」のご案内

当大社では、御祭神へ奉納された刀剣を特別公開する展覧会を開催します。刀匠の技の結晶を皆様是非ご覧下さい。

- ◆会期 平成23年10月29日(土) ~ 11月23日(祝)
- ◆時間 午前9時~午後4時30分
- ◆会場 宗像大社神宝館1階展示室
- ◆拝観料 大人 500円
大学・高校生 300円
中・小学生 200円
★15名以上は1名に付100円引

※展示替え作業のため、平成23年10月27日(木)・28日(金)、11月24日(木)・25日(金)は、館内の一部をご覧いただけない場合がございます。詳しくは宗像大社0940-62-1311へお問い合わせ下さい。

第41回

西日本菊花大会のご案内

神郡宗像に菊の季節が到来しました。九州各県を中心に、全国の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた銘花約三千鉢が、境内中に展示されます。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、この他に大臣賞が十一本授与され、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれています。

期間中は、観菊者、七五三詣での家族連れなどで賑わいます。また菊苗・菊鉢の販売、勅使館をこの時期限定で特別に開放「抹茶コーナー」、豪華景品が当たる「菊みくじ」、宗像観光協会の運営する「いっぽく茶屋」なども開かれています。是非、御参拝下さいませよう御案内申し上げます。

- ◆会期 平成23年11月1日(火)~22日(火)
- ◆時間 終日
- ◆会場 宗像大社境内
- ◆拝観料 無料



神郡の祭り

現在、当大社が管理するお社は九社あり、折々の祭典では大社神職が意向奉仕している。

徳満神社 秋季大祭

初秋の去る九月十一日、午前十一時より宗像市深田に鎮座する徳満神社(御祭神・大国主命)で秋季大祭が斎行された。当大社より神職一名が出向奉仕し、地元深田区の人々多数参列の下、祭典が厳かに執り行われた。

徳満神社は、農耕の神、特に牛馬の神として崇敬が篤く、昔日の大祭日には、宗像内外から多くの参拝者が訪れ、油単・黄色の鉢巻き等で飾り立てられた牛馬の参拝姿も有り盛大なものであったそうだ。現在も拝殿内には奉納された多くの牛馬の絵馬が飾られており往時を偲ばせてくれる。



津加計志神社 秋季大祭

宗像市神湊に鎮座する津加計志神社(宗像三女神)で秋空澄む九月十一日、午前十一時より当大社神職一名奉仕の下、秋季大祭が斎行された。

津加計志神社の元は、神湊草崎に鎮座していた綱懸神社であり、祭神は市杵島姫命、相殿に宗像大宮司家の遠祖・吾田片隅命を併せ祀ると古伝にはある。綱懸神社は、現在、当大社頓宮にお祀りされている。

尚、今回氏子の皆様から真心からなる幟が奉納された。

牟田尻天満宮 神幸祭

九月十三日夕刻より、宗像市牟田尻に鎮座する天満宮(御祭神・菅原道真公)で御神幸が行われた。夕刻当大社神職一名奉仕の元、天満宮より御神体が神輿に遷され御神幸が始まった。御神幸自体今では珍しいが、牟田尻の御神幸は約四百年前に遡る事が出来、戦後一時途絶えたが昭和六十三年に復活した。奴姿で羽熊を振る姿は勇壮で見応えがある。

御神輿は、御旅所に定められた牟田尻公民館で二時間程御休息され、その間公民館では特設スタジオでの演芸等、宴が盛會に催され老若男女、当大社神職も加わり楽しげな声がかましていた。午後九時頃、還御祭が行われ盛大裡の内に今年の御神幸も終了した。



津志八幡神社 宮座祭

九月十八日、午前十一時、大社近く山ノ上区に鎮座する津志八幡神社にて宮座祭が執り行われた。宮司並びに神職一名が出向奉仕をした。

主神は応神天皇、相殿に仲哀天皇、神功皇后をお祀りしている。神社の縁起によると古代、この地には官道が通り馬も置かれ、宿場として栄えていたそうだ。後年、事情により神社が他所に遷されてしまうが、神社再建に対する地元の熱意が実り、時の福岡藩主の心を動かし、現在の神社が復興されたそうである。

伊摩神社 宮座祭

台風十五号の影響により生憎の曇空ではあったが九月十九日午前十一時より大社近く吉田区に鎮座する伊摩神社(御祭神・応神天皇外)にて宮座祭が執り行われた。宮司並びに神職一名が出向、区長・総代・氏子大勢参集の下、盛大に斎行された。

又、同区には祭典終了後、神酒拝戴に先立ち、熨斗あわび等で飾り立てられた縁起物を区長が代表して頂く「お熨斗上げ」という他区にはない珍しい慣習も残っている。



第16回

出光興産(株) 中堅社員研修所感

出光興産株式会社 人事部教育課

去る九月二日から四日まで

の三日間、第十六回中堅社員研修の宗像大社研修を実施させて頂きました。今回の研修には国内及び、アメリカ、マレーシア、ベトナムで勤務している社員を含む総勢三十八名が参

加しました。

宗像大社研修は「日常生活と離れた神域に身をおくことで感性を高めること」「創業者・店主出光佐三が多大な影響を受け経営の原点とした日本

の伝統文化に触れその思いを感じ取ること」の二つを目的に行わせて頂いております。

研修開始に際し、宗像大社で研修をさせて頂くことを御祭神様に奉告し、研修が無事に実り多いものになる事を祈願する研修開始奉告祭を本殿で執り行いました。その後、高向宮司より「出光興産創立百周年の記念日に『日本人にかえれ』という社告を出されているのを見ました。これは、各国から賞賛を得た東日本大震災時の日本人の対応も踏まえ、一人一人が日本人としての自分



が日本人としての自分

の在り方を見直そうというメッセージだと受け取りました。この日本人としての在り方は道徳にあると思っておりますが、その原点は神道にあると言えます。この宗像大社では是非その原点を体感して欲しい。」と講話を頂きました。

また、神職の方と同じようにご奉仕させて頂くため、白衣袴の着方や祭作法からご指導頂きました。ほとんどの参加者が初めての経験であり、日常生活から離れた神域に身を置いているという実感もあり、自然と感性が高まっていくのを感じました。



高宮での鎮魂



宮司開講挨拶

二泊三日のスケジュールの中、神宝館見学、第二宮・第三宮・高宮参拝、宗像大社の御由緒の説明、雅楽鑑賞、神職の皆様との懇談と本当に多くの経験をさせて頂きました。特に、神職の皆様との懇談では、神職の皆様への飾りの無いお話により、神道や宗像大社について理解が深まると同時に、日頃疑問に思っていることが解消されました。

研修生からは「非日常の空間に身を置き、鎮魂を實施する事で、仕事で一杯であった頭の中を一度リセットすることができた。」「神職の方との討議を通じて、神道をより身

近に感じ、子供達にも伝えていきたい文化だと感じた。」「神職の方々がどんな気持ちで神様にお仕えしているのか懇談会で感じる事ができた。自分の日常と照らし合わせ、自分はどうあるべきか考えさせられた」等の感想が寄せられた事より、店主が多大な影響を受け経営の原点とした日本の伝統文化に触れ、その思いを感ずるといふ当初目的が達せられたと考えております。

参加者の事を親身に考えお世話頂きました宗像大社の皆様には心より感謝申し上げます。

最後に、宗像大社の益々のご繁栄をお祈り申し上げ、研修の所感とさせて頂きます。



平成23年度 学芸員実習開催

去る八月十六日から八月二十六日まで、当大社神宝館において学芸員実習が行われた。本実習は、大学で学芸員資格取得を目指し博物館学芸員過程を履修している学生を対象に、当大社文化財管理事務局が毎年実施している。今年度は県内外の学生計六名が受講した。

実習生は毎朝、当大社職員とともに朝拝式に参列して実習に臨んだ。初日は慣れない玉串拝礼の作法に戸惑い、緊張していたが、次第に余裕を持って心身を清めていた。

実習は、葦津文化財管理事務局長による講話から始まり、



拓本採り



刀剣手入れ

考古学(松本肇氏・沖ノ島祭祀について)、民俗学(石井忠氏・漂着物について、楠本正氏・民具について)、歴史学(河窪学芸員・古文書について)、博物館学(重住学芸員・神道博物館の意義と活動について)などの講義を受けて、宗像大社をとりまく歴史を見つめながら、刀剣手入れ(藤川宣重氏)、拓本採りや資料の取り扱い、展示作業(重住学芸員)などの実務を体験した。また、宗像市から行政の文化財保護への取り組みについて指導いただいたり、芦屋町の資料館見学では博物館活動の多様性を目の当たりにした。大島へも

渡り、中津宮で正式参拝、さらに沖ノ島を遥拝、信仰の尊厳も体得した。

今年度は初の試みとして、当社境内の石碑のうち、文字が解読されず内容が不明確なものについて拓本採りをした。屋外での採拓の場合、湿度湿度の状況を察知しながら大型のものでも手早く採らなければならぬ。解読の参考資料にするため拓本の完成度も求められる。つまり、採拓作業には学芸員の本質である見識、技術、根気が不可欠なのであるが、実習生は学芸員の指導を仰ぎながら立派な拓本をつくりあげた。

カリキュラムを全て消化した学生たちは、習得した知見、体得した認識を誠実に受け止め、文化財保護や文化の啓発・継承に携わる学芸員の意義と責務について、それぞれに理解を深めたようである。学芸員の魅力も湧き上がり、学芸員になるという夢も膨らんだ様子であった。大変喜ばしいことである。夢の実現を大いに期待したい。

九州女子短期大学 プチインターンシップ 宗像市立 河東中学校 職場体験学習

去る、九月十二日〜十七日までの六日間、九州女子短期大学生二名、宗像市立河東中学校学生五名の計七名が当大社にて職場体験を行った。

プチインターンシップとは文部科学省の大学就業力育成支援事業の一つで学生と社会人の間にプレ社会人を作り、地域において学生の社会人基礎力を育成し、その若い力を地域に還元し地域活性化を図る事を目的に行われている学



職業体験

生育成事業である。中学生の職場体験学習は市内中学校七校の二年生約九百名を市内の事業所に振り分け社会体験を行うことで生徒の社会における自主性、協同性、責任感を学ぶ取り組みである。

最終日にはディスカッションを行い、体験期間中の素朴な疑問や、神社の役割などについて広く意見が交換された。

期間中、短大生・中学生達は、主に神社の顔である授与所で社頭奉仕を体験。袴姿で巫

あつたと思う。これからの活躍を心より期待したい。

今回の体験学習において、これらの社会人として役立つ事が一つでも得られたなら今回の研修の意義があつたと思う。これからの活躍を心より期待したい。

(続)

災の寄物

260

いしいただし



今年は災害列島と化し、大震災、大津波、台風、大洪水が各地でおこった。原発も加わり厳しいものとなった。まさに国難である。

いまから八八年前の大正一二年(一九二三)九月一日午前一時五〇分、関東大地震がおこった。その規模はM7.で



宮城前に避難者

あった。震源は相模湾西北部と計測された。

「地震は小田原の根府川方面が最も激烈であったが、東京・横浜では地震による火災が加わって、最大の被害を生んだ。

東京は三日未明まで燃えつづけ、下町一帯から山の手の一部にかけて、全市街の三分の二が焼失した。なかでも、本所の陸軍、被服廠あとでは火の旋風がおこり一挙に三万八千人の命が失われた。横浜では煉瓦作りの洋館などが倒壊して多くの圧死者を出したうえ、全市街がほとんど消失ないし全半壊し、四日まで、まったく救援の手がとどかなかつた。

震災による被害は死者九万九三三三人、負傷者十万三三三三人、行方不明四万三四七六六人、

全壊家屋二万八二六六戸、半壊家屋二万六二二三三戸、焼失家屋四四万七二二八戸、流失家屋八六八戸、罹災者数は三四〇万人にのぼっている(国史大辞典)

未曾有の状況に、人々の不安と恐怖が増大し、朝鮮人や社会主義者が暴動を起すと流言がとびかい、虐殺が行われた。



竹久夢二のスケッチ(左)

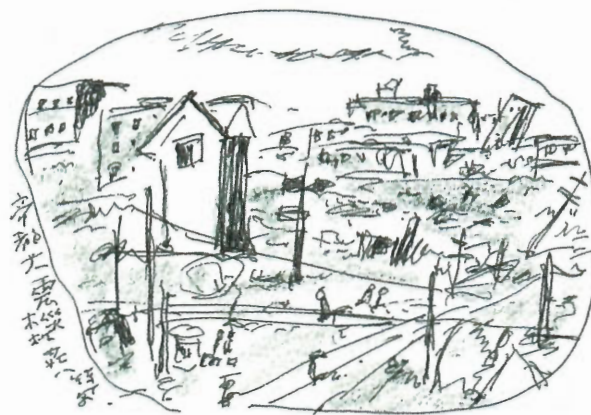
少し記述がダブルが「関東震災画報」では次のように冒頭で述べられている。

「大正一二年九月一日こそは日本国民が戦慄なしに口にする事の出来ない呪われの日であった。この日、正午近く起った関東一府六縣に亘る大地震は大震災に伴い、忽ち数十萬の民家を焼き拂い、交通機関を破壊し、死傷者算なく、饑渴に類する者百数十萬、親は子を呼び、子は親を呼び、天日為めに暗

く、真に前古無比の大惨状を呈した中にも、大建築の美観と、文明的施設とを誇る東京・横浜の二大都市は忽ち火焰の海となり、瞬くひまに荒涼たる焦土と化し、光輝ある日東文化の華は永えに壊滅し去つてまた探ぬべくもない。然し我等は徒にこの大自然の暴虐の前に自失してあつてはならぬ。国民的大災厄の日は同時にまた国民的大試練の日であった。」



米国での震災募金ポスター



宗 大震災の惨状

この大地震を貞明皇后(大正天皇の皇后)は「つみあらば神いさめませほどにかなしきたみのよわるあわれさ」「上下もこころ一つにつしみて神のいさめをかしこまんな」と読んだ。地震を「神のいさめ」ととらえている。

第六〇二回

宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日メット



北九州市 八幡西区 豊田 光子
腰屈むも亡母に似て来ぬ隙見せず仕事の袋つねに吊るして
尊敬する母と腰の曲がり方まで似てきた作者。三句以下が
誰の事か分かり辛いので、(隙みせず仕事を袋をつね吊るせ
し妣に似て来ぬ腰の屈むも)としては。

福津市 若木台 野間 精一
うちつづく炎天になべて伏しゐるに荒地野菊はすこやかに咲く
下の句が魅力的。ただ、荒地野菊の群生が伏すのか、ほか
の草だけが伏し荒地野菊は立っているのか迷う。初句を
(炎天下)にし、言葉をおぎなってみては。

宗像市 土穴 山本 静子
ド・ドーン・パン・ガヤガヤ・ヒルヒルッ 火花あがる小川のそばで
オノマトペを多用した楽しい一首。欲を言えば花火の
上がる順序に音が並べられたらと思う。

福津市 若木台 山崎 公俊
ものしづかに歌会準備すすみゆき冷房機ときにことりと鳴れる
なにか作業をしているのか、肅々とすすむ歌会の準備。
冷房機のちいさな音が静けさを強調する。

うきは市 浮羽町 向 則正
パムツカレの石灰棚に湯が溢れ空の色映し青くすみたり
先月に続くトルコ旅行の歌。写真を見ると石灰棚は棚田
に似た形でそれぞれが湯を湛えているらしい。四句は
やや説明的なので語順を入れ換え(映す空の色)に。

福津市 中央 池浦千鶴子
電柱にはげしく鳴ける油蟬その朝しづかに夏を終れり
夏の終わりの蟬の声に無常を感じた作者か。時制のずれ
が気になるので二句を(鳴きあし)と過去に。四句の朝は
(この朝)のほうが臨場感が出るだろう。

福岡市 南区 井田有久衣
かいま見た隣家の庭の「鉄仙」はうす紫に華麗な花を
隣家の庭テッセンの花の美しさに感動した作者。結句は
落ち着きよく(華麗に咲けり)に。鉄仙は通常は鉄線。

福津市 星ヶ丘 佐々木和彦
強打でも野手の正面をつくといふ直球のあることを知りけり
強打者の打球が野手にそのまま取られたのだろうか。
応援していたチームの打者なら残念だろう。打った選
手の名があると理解しやすくなる。

宗像市 池田 森 龍子
猛暑日の厨に太字にサト・シオと印せる容器常と変らず
猛暑日で疲れ気味の作者なのに、台所の道具はいつもと
かわらぬ静かな姿。太字のサト・シオが面白い。

宗像市 田久 巻 桔梗
去年から待ちあしわれに七十路の妻やくそくの銀の髪見す
七十歳になったら髪染めをやめると約束した夫人の銀
髪を一年待って見た作者と読んだ。状況が複雑なので、
夫人の約束と、今見る銀髪の二首に分けてはいかが。

宗像市 日の里 大和美由紀
縁側に腰を降ろして涼みつつ母の繰り言思ひ出しをり
老いた母の繰り言を聞くのは切ない。二句を(涼みつつ
思ふ)などとし、三句以下に繰り言の内容をしめす言葉を
入れられたら良いと思う。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子
藤色の和服すらりと着こなして駅に佇む人に見惚るる
夢二の絵のような一首。場所が駅舎かホームかが分かると
更に景がよく見えてくる。

選者歌
ATMの身体認証で否定されわたしはしばし名前うしなふ
銀行の空気はつかに電気帯び手続きすめば頬がけばだつ

第五七七回

俳句作品集

宗像市 日の里 花田いつ枝

海よりの風吹き抜ける白露かな

編集後記

今回は私事です。御
勸弁を▼結婚して早
三年。コウノトリが二つの新しい命を我
家に運んで来てくれました。予定日は、
十月一日、秋季大祭「みあれ祭」当日で
す▼年に一度、沖津宮・中津宮の御分霊
が辺津宮にお出ましになり、御祭神の
御恵をお頒け頂ける目出度い日です。

当初、お日柄の事はかり考えていまし
たが、当日が神職参籠日である事を思
い出しました。その日は、身を清める
為、神職全員神社で宿泊します。私の
退職迄、三十有余年、それ迄子供の誕生
日に立ち会つことは叶いませんが、この
ような目出度き日に産まれてきてくれ
る事を非常に喜んでます▼一日から
の大祭が多くのお参拝者で賑わうこと
を願いつつ、子等の無事誕生も願う日々
です。来月号にて御報告致します。(松)

発行所

宗像大社社務所・宗像会

住所 千八一一一三五〇五

福岡県宗像市田島三三三

電話 (〇九四〇)六二一一三二(代)

発行人 葦津幹之

編集人 大塚宗延・松林 拓

制作・印刷 ゼネラルアサヒ

毎月1日発行
定価1年送料共 1,000円